

入賞

当たり前にはできるとは

「…世のなかにはふつうのことがあたりまえにできる人とできない人がいる。でも、できないことを許し、守ってくれる人もいて…わたしはそんなあたたかな人たちにかこまれ、ささえられて生きている。」

これは視覚障害である櫻井ようこさんの「アンソニー、きみがいるから」という本の中に出てくる言葉です。以前、この本を読んで、この言葉にとっても感動しました。櫻井さんの前向きな生き方が「すごいな」と感じたからです。でも、「あたりまえにできるとは…。」

あたりまえにできるとはなんだろう？考えていた私に母が話してくれました。私達は、大人になったら車の運転をするために、教習所という所に、運転免許を取りに行くそうです。そこでは、当たり前、右足でアクセルとブレーキを使う方法を教えてくれるそうです。でも、私の母は、左足で運転をしています。どうしてかというと、母が十九歳の時に、大きな事故にあい、右足の足首から下は、ほとんど自分では動かせなくなってしまったそうです。そのため、事故から数年経ってから、左足で免許を取ったそうです。母はどこにでも車で連れて行ってくれます。「とても運転が上手ですとは言えないかもしれませんが、ふつうに運転をしています。」

「左足で車の運転をしているの!？」

と初めて聞いた人には、毎回ビックリされます。そんな場面を私は小さい頃から何度も見て育ってきました。

「これがママの『ふつう』で『あたりまえ』でも、右足で車の運転をするって『世の中の人があたりまえにできる』ことができないってことなのよ。」

そう話してくれました。私や他の人が、当たり前にはできることが、母や櫻井さんのような障害者の人達には、あたりまえにできないのです。こんなこともありました。母が、授業参観で学校に来た時のことです。足が不自由な母は、階段の上り下りで、スリッパがすぐにぬげてしまいます。そんな時母は、ひょいっとスリッパを持ってそのままの足で、階段を歩

岩出第二中学校 1年 岩崎 菜乃

きます。これも母の「あたりまえ」なのです。

今回、母に、昔の事故の時の話やその後の話を色々聞かせてもらって、小さい頃から知っていたはずなのに、今までは、理解できていなかったことも、中学生になった私なりに理解できたこともたくさんありました。思い返してみると、母は、遊びにでかけて、一日中歩き回り、健康な私でさえ、足が痛くなるのに、足が不自由な母は、「足が痛い」とか「つかれた」とかあまり言いません。そのことを母に聞いてみると、

「楽しくなくなるでしょ。」

と笑って言っていました。私の母は、いじっぱりで、強がり、とてもチャーミングです。そんな母が、私は大好きです。小さかったころの私は、これまでは、一つしか持たなかった荷物も、中学生になった私は、二つ持とう。ふり返って母を待つのではなく、母のとなりをいっしょに歩こう。そんな私になりたいです。

私のメッセージを知ってもらって、「自分のあたりまえ」が「世の中のあたりまえ」の全てではないんだということに気付いてもらえたらと思います。そして、私もそうなのですが、これからは、助けや手伝いが必要な人がいる時は、進んで手をさし出せる自分になりたいです。なって下さい。